

『巴里に死す』論

鈴木吉維

——死と再生の世界——

一

昭和十七年一月から一年間『婦人公論』に連載され、翌年中央公論社から刊行された『巴里に死す』は、太平洋戦争のさなかに書かれた作品である。日本文学報国会が組織された年に敵国フランスを舞台に、生命尊重の思想を鼓舞する作品を発表した芹沢光治良の執筆意図は何か。主人公宮村伸子の生き方を軸に、その主張するところを明らかにすることが本論の目的である。

芹沢は作品を振り返るなかで「名前を覚えていて、しかも、その女主人公が現実に生きていたように今も感ずるのは、ただ『巴里に死す』の伸子と『愛と死の書』の若子の二人きりである」(1)と述べている。この二作品は結核体験と生と死の問題という共通点を持つ。作者が数多くの作品のなかからもっとも印象に残るといふ作品の背後には、自身の療養生活と作者の周囲で次々に起こった身内の死が影響を与えている。

芹沢は両親が天理教に帰依したために肉親とは縁薄く育つが、昭和十一年九月九日、作者四十歳のとき実母芹沢はるが六十一歳で他界する。その思いを記したのが『秘蹟——母の肖像』(昭和十六年十月『文藝春秋』)である。また学生時代から物心両面で芹沢を支えた養父石丸助三郎が昭和十二年十月、胃がんのために死去。これをモチーフとして『愛と死の書』が執筆される。最愛の夫を亡くした若子という女性が戦火の中国へ赴くという小説である。さらに同年十二月には妻金江の母藍川しむが亡くなる。名古屋鉄道の前身愛知電鉄の社長夫人であるが、最晩年は芹沢が名古屋で看病し最期を看取ったという。この「しむ」という名前が『巴里に死す』の「伸子しんこ」に繋がっているのは偶然ではない。芹沢はパリ留学時代、近況報告として三百数十枚もの絵葉書を名古屋の義父母宛てに送っているが、それをしむは「大切な物です」とすべて保管し、帰国後芹沢の手許に届けた。息子が出征してからは寒風吹きすさぶプラットホームで、出征兵士の慰問を欠かさず行う

ような婦人で、自己犠牲の美德を備えた人として「伸子」に結実していったのである。

さらに芹沢の書齋はサロンのように学生たちが集まり、その学生たちも戦火の拡大とともに出征していき、死の影は芹沢の身近に感じられるようになってきていた。この時期の芹沢にとって生と死の問題は非常に重要なテーマであった。「現在は生命を軽んずる時代で、前線に征く者も死を急ぐようだが、銃後をまもる者も生きることを考えないが、私は小説のテーマとして、生命がどんなに貴く大切か、死を急ぐな、と考えさせるような主題を選びたい」(2)、「戦争中、人間の生命が軽んじられ、若い人々が死を急ぐような時になって、憤りと悲しみから、生命は尊く死を急ぐなと、絶叫したいようなのを耐えて、このつつましい小説を一年間書きつづけ」(3)と述べている。フランス留学時代に結核に罹った芹沢は、結核療養所で死と隣り合わせの日々を送り、経済学者への道をあきらめ、生れたばかりの子どもから離れて暮さざるを得なかった。このとき生と死の問題が一生のテーマとして決定づけられたのである。

また留学先のフランスは戦勝国でありながら第一次世界大戦後のインフレに苦しみ、戦争の傷あとを残していた。昭和十三年には戦渦の中国大陸を歩き、日本軍の横暴ぶりも目の当たりにした。太平洋戦争という全面戦争に突入していくとき、いかに多くの人命が失われ不幸な事態が起こっていくかが、このときの芹沢には既に予測できたのである。『巴里に死す』は実母はる、養父石丸助

三郎、義母藍川しむという身近な人々の死から端を発して、若者たちの出征、戦争という大量の悲劇を生む社会状況への憂慮と生命尊重を訴える作品として発表されたのである。

『巴里に死す』は日記体の作品で、ヒロイン伸子の成長小説である。伸子は旧来の一般的な日本女性として大人になるが、夫宮村は女性も独立した人格であり、伸子もそうあってほしいと願う。この小説の最も強く訴えるところは、この伸子の自己練成、自己鍛錬、愛の精進であろう。芹沢の義母藍川しむが、夫の婚姻外の子どもを育てながら夫に尽くし、出征兵士たちに捧げた「まこと」の気持ちモチーフにしながら、作中の伸子は自己犠牲の美しさを發揮していく。わがままで「卑俗な日常生活のみが人間の生活で、それを越えた精神の世界が存在するのだとは、まだ識らなかつた」(4)伸子が、妊娠を契機に変わり始める。結核のために中絶を勧める医師に対して「私の健康をそこなうことがありません。子供のために命をささげること、母としての喜びでございます」(傍点引用者、以下すべて同じ)と、断固拒否の意思を示す。出産の場面でも「生まれたんだ、自分がなくなつたから生まれたんだ」と述べ、療養中の生活からも、「考えれば、自分の歎喜や欲望を殺して、その代わりにお前や宮村の幸福を願わなければ」といふことが、遠くはなれて、ここで一人孤独に療養する間に、私の体得したさとりのようなものであった」としている。この「さとり」とは、自分を殺して他者の幸福を願う自己犠牲の精神である。最期の場面でも「お母さんはお

父さんにふさわしい女性になろうと、奮闘しました。(略)私はなかなかお父様のよい妻になれなかったが、私の努力はむだではなく、お前のための肥料だったと安心しております」と、夫や娘の犠牲になることが幸せだという精神で貫かれている。

このように伸子は子どもや夫のために生きた自己犠牲の女性として描かれているのだが、自己犠牲の精神とは己を殺して他者を生かそうとするものである。財産をほこりだとして天理教にすべて捧げ、ただ人助けのために生き、そして死んでいった実母はる。夫や子どものために生涯を捧げるような生き方をした義母藍川しむ。芹沢を実子のように可愛がった石丸助三郎。そのまことの気持ち、作者は「伸子」の生き方に反映させたのである。また作者はフランスで闘病中、娘宛てに書いた数多くの手紙「マリ―に残す言葉」をしたためた。たとえ異国の地で死ぬことになっても自身の考え方を娘に伝えたいはいられなかったのである。自己犠牲は己の消滅ではなく他者の中で永遠に行き続けていくことなのである。

二

次に伸子と鞠子との関係であるが、初め伸子は宮村のかつての恋人鞠子に強く嫉妬する。しだいに自己を確立するための目標とし、やがて自分の死後は鞠子を頼れとまで記すようになる。伸子にとって鞠子とはどのような存在であったのかを考えてみたい。

夫宮村のかつての恋人青木鞠子は単独フランスに留学した才媛

で、向学心に燃え、自立した精神の持ち主である。フランス人からも尊敬の眼差しで見られるような理想的な女性として描かれている。自己主張や信念を持つように教育されなかった伸子にとって、それは知らない世界の女性であった。自分が愛されるために宮村が愛した鞠子になろうというのは、娘万里子が批判するように哀れである。宮村が学会でドイツに行くとき「こんな場合に、あの青木鞠子さんならばどうするでしょうと、ふと思い、あの人にまけないように健気な態度をとらなければならぬと奮発した」と、鞠子の思考方法を借りて宮村に愛される女性になろうとしている。このレベルが伸子の鞠子認識のスタートである。しかし妊娠や中絶の勧告、その後の出産というように、人生の重大な岐路においては対立を恐れず真正面から夫やフランス人医師に対して自己を主張し、「道理にも東西二つある」といって譲ることをしない。それは頑迷であるというよりは、子を宿して初めて自分というものと向き合った伸子の、譲れない自我であった。出産前は鞠子が目標であったが、赤ん坊に名前をつけるとき、「万理子と名付けたことで、私は自分にも、あの人にも勝ったような気持ちにして、喜びの涙があふれたのだよ」と述べているように、すでに鞠子を越えているのである。その後も伸子は鞠子のようにになりたい、万里子にも鞠子のようになりたいと語りかけながら、自分の道を生き始めている。娘万里子が生れてからの伸子は立派な母、よき妻になろうと努力するが、「万一母をもとめるようなことがあったら、お前の名付け親ともいふべき、鞠子さん――野川

さんの奥さんに会ってごらん」とまでいうようになる。万理子と名づけることで今までの人生を客観視し、自己を律し、自我を確立することによって、いつの間にか目標としていた鞠子を越えているのである。

娘万理子は母伸子のことを「自分を生かすことで、良人をも生かす道が、女性にとって本道ではないでしょうか」といって批判するが、伸子にとって憧れと羨望の対象であった鞠子もまた、周囲の幸福を願うために宮村との結婚を諦めたのであるから、万理子によって批判される側にある。ということとは万理子は伸子や鞠子を越えたところに存在する、新しい時代の理想の女性像を示しているといえるのである。

三

芹沢光治良にとって神や宗教の問題は生涯を通じたテーマである。天理教に帰依した両親と、そのために捨てられた子として育った光治良。このことは『教祖様』や『死の扉の前で』などに作品化されているし、『人間の運命』はその自伝的要素から、天理教との関わりを克明に記している。晩年の『神の微笑』に始まるシリーズは、天理教の中山みきからイエス、仏陀、そして大自然の親神にいたる神観念を記している。終生一貫して神を追求してきた芹沢だが、戦時中は作品を発表する機会が少なかったため、聖書を熟読したという。戦後執筆された『教祖様』にもその影響がみられるが、この『巴里に死す』にもキリスト教（カトリック）

の「神様」がしばしば登場する。作者は伸子をクリスマスイブの日に入院させたり、万理子の誕生日を「カトリックの方では聖ジュズヴェーヴの日」にしたりと、カトリック色を濃厚に漂わせている。ただ明確にキリスト教の「神様」と断言しているわけではなく、「その時にたしかカトリックに改宗なすったようでした」と、断定を避けて曖昧な表現にしている。これは芹沢の神意識をよく映し出しているもので、教団や組織に所属せず、ただ唯一絶対の創造主たる神と向き合おうとする態度である。伸子はキリスト教の国にあつて「神様」を強烈に求めながら、教団や宗教組織に入信しない。芹沢のこの態度は生涯貫かれたものであり、『巴里に死す』においても例外ではない。

伸子と神との対話は、子どもを妊娠したところから始まる。ここでも作者は注意深く、フランス人の信じるカトリックと一線を画している。「妊娠したことを知ると、不思議にも神様という観念が私にもやどったようである。その神様というのは、カトリックの教義の裏づけのあるマルセルさんとはちがって、実に漠然としたものであるが、やはり全知全能で、人間のなすことをちゃんとみそなわしているように考えられた。(略)妊娠したと同時に天から授かったようなものであるとしか、思われない。」というように、神観念を直感的にとらえるのである。妊娠＝神意識の獲得ということは、妊娠は神によって与えられたということである。この神を見つめる作業こそ内省の作業であり、伸子を成長させていく原動力である。

伸子の妊娠が夫と自分との間を垣根なくつなぐものであり、神から与えられたものであるとするならば、中絶は伸子にとって受け入れられないことである。中絶を迫られた伸子は「神様から授けられました生命を、たとえ私の健康のためとはいえ、私の都合で葬っては神様がお赦しになりません」と断固拒否する。「宮村にも詫び、神様にもお詫びして、許しをこわなければいけない心情であった。今からでも改悛して、よい妻となれば立派に出産させてもらえるであろうと、かんがえたのである。(略)神様があれば、その神様の前にひれ伏して許しを願いたい」と、夫婦の絆を考えると、神を探し求める気持ちが見えなくなった。

出産が許されたとき「わがまことを神様がよしとしてお受けになったように」思い、「私は正しい神の審判を受けたように」感じ、「出産できればそれでよい、育てることは、その時になってまた神様がよいようにおはからい下さるであろうと」考えるのである。この「出産できればそれでよい」という願いは、その後悲しい結末としてかなうことになる。その意味からも芹沢のいう神はすべての願いをかなえるのである。

先にも述べたように芹沢は唯一絶対の神を肯定しながらも、教団や組織に対しては否定的である。「お前を授けてもらった日に感得した神様と、私のなかにある魂の不滅であることは、理屈なしに信じられる。その目に見えない神様は、病室で密室の祈りをささげれば、私の魂の波動のように感応して、厳然と偉大なお力を啓示して下さい」と述べて、「神様はカトリックに改宗しなければ

お喜びにならないような、頑なところはおありなさるまい」としている。芹沢は幼少年期から信仰と教団で苦しみ、そのたびに神を求めて対話し、願いはすべてかなえられたと述べている。そうした実感が精神の根本にあるため、このような伸子のことばとして描かれているのである。同時に教団の持つ欺瞞性に対しては強く拒否の態度を貫いている。『巴里に死す』のこの場面でも「教会へ出掛けた」ときにルネ夫人に声をかけられ、うかうかパリへ行って療養の成果を台なしにしてしまうことになる。教会へ行く悪魔に魅入られたように心を乱すという皮肉を作者は描いているのである。

伸子の手記の最後は「神様、パリに行くことが、私の健康によいことか悪いことか、わかりません。ただ母親の場所は子供のそばにあります。子供のそばに在ることで、私が滅びることになっても、よろこびでございます。パリで死にましよう。今のままでは私は、子供には死んだも同然です。せめて、子供をつれて、日本に帰る日まで、私をお召しになりませんように」という神への語りかけで終わっている。神との対話を通して内省が深まり、目標とした鞠子をも越えて、神々しさの漂う女性として死んでいくのである。この神との対話Ⅱ内省こそ作者の読者への訴えかけである。人間が不完全で、努力や精進の連続であるとするならば、この内省こそが精神の深みへと導く唯一の方法である。さらに人間にとって死が避けられないものである以上、その生の証は次世代の人に受け継がれることによってしか生き続けることができる

い。そこに死と再生のドラマが生れるのである。伸子の死が万理子の新しい生に再生されるドラマがここには描かれている。戦時下という死が不可避な問題として迫っていたときだからこそ、芹沢は死と再生のドラマを描いて、死者を生かす作品を著したのである。主人公宮村夫妻の愛と死を描きながら、戦時下の生命軽視の風潮を憂い、読者に生命尊重の思想を訴える作品を執筆し、さらに不幸にして夫や子を戦争でなくした者には、その死者の魂を残った者が受け継ぐことによって、死者を生かし続けることができるというメッセージを述べているのである。

『巴里に死す』は序章と終章との間にはさまれた伸子の手記という体裁をとっているが、この序章と終章は現代に設定され、娘万里子の結婚を軸にしている。万里子の成長と自立の象徴として結婚が描かれているのであるが、娘万里子は亡き母を「ただ悲しいことは、母が一途にすがりつくように父を愛そうとした態度でございます。同じ女性としてあまりご自分に自信のないぐうたらさが、お気の毒で歯痒く存じました」と批判している。現代的で確固たる自己を確立した女性である娘万里子は、旧世代の母を同じ女性として見たときに、「お気の毒な、おいたわしい」哀れな存在として感じている。しかし臨終間近かな伸子の姿は「お母様が微笑なされると、さびしいような気高いような美しさに、私もみとれましたが、精神の美しさが輝くのでしょうか」と、周囲のフランス人たちを感動させるほどの高みに達している。自己犠牲の美しさはつねに過程の中にあることを作者は述べて、伸子は死

ぬまでその努力を惜しまず、自己を不十分なものとして認識しながら精進を続けたのである。そうした生き方が父宮村やフランス時代の知人を経て娘万里子に受け継がれ、伸子の行き着いたところから万里子が発して、自立した理想的な女性として成長するのである。伸子の生と死は娘万里子のいうように、決して哀れなものではないのである。

〈注〉

(1) 『こころの広場』「ある創作の秘密」昭和五十二年四月

十五日 新潮社

(2) 同前「ある創作の秘密」

(3) 同前「三パリで死んだ二人の女主人公」

(4) 『芹沢光治良文学館 幸福の鏡』平成八年十月十日 新潮社 以下『巴里に死す』からの本文引用はすべてこれによる

(すずき・よしつな 神奈川県立相模台工業高校)

A critical observation of “Pari ni shisu”

The world of death and resurrection

Yoshitsuna Suzuki